人、自然、アートと街をつなぐ

左京変人図鑑

第2号
FREE

世界中のアートを繋いできた変人

左京区に関わる
素敵な変人インタビュー

金沢21世紀美術館 館長
長谷川 祐子氏

世界各国で展覧会を企画してきたキュレーターの長谷川祐子氏。ウスビ・サコ氏からの紹介でインタビューが実現しました。金沢21世紀美術館の立ち上げにも携わり、世界中のアートを扱いさまざまな国や背景の人々と共に仕事をしてきた視点からお話を伺いました。

金沢 21 世紀美術館 館長

長谷川 祐子

プロフィール

金沢 21 世紀美術館館長／東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授／キュレーター／美術批評。京都大学法学部卒業。東京藝術大学美術研究科修士課程修了。水戸芸術館学芸員、ホイットニー美術館客員キュレーター、世田谷美術館学芸員、金沢 21 世紀美術館学芸課長及び芸術監督、東京都現代美術館学芸課長及び参事を経て、昨年 4 月より現職。

「世界中のアートを繋いできた変人」

――左京区に暮らしたのは大学入学がきっかけですか？

はい、京都大学だったので左京が便利だったということもありますが、いろいろな意味で気に入っています。哲学の道の界隈は安心して住める場所ですし、雰囲気があるので好きなエリアです。

――京都大学法学部卒業後、東京藝術大学美術学部に進学しておられますが、なぜでしょうか？

その答えはいたってシンプルです。親からは法学部じゃないとお金を出さないと言われたのでその通りに進学しました。でも、実際に法学部に行き、ある程度、法律の学問をやってみて、やはり違うと感じたので、働いたり奨学金を得たりして、自分の力で東京藝術大学に進学しました。

――では、もともと美術系に進学したかったということですか？

私は、そちらに行きたかったんです。絵も描いていました。

――キュレーターという仕事について教えていただけますか？

キュレーターというのは展覧会を作るということがベースの仕事です。この展覧会というのがプロジェクトであったり、金沢21世紀美術館もそうですが美術館をプロデュースしたり、みんなが集まれる場所をプロデュースしてシンポジウムを作ったり、パブリケーション（出版物）を作ったりと、多岐に渡ります。キュレーターはリサーチャーでありながら、自身の一つの考え方を持って、関係価値を形成していく。そして、その形成された関係価値を、国や背景の異なるいろいろな方たちに、どうすれば共有できるかという一つの方法論を考えていく人だと、考えていただければと思います。ほかにもマップを作る人、ナビゲーター、ファシリテーターなど、いろいろな言い方で表現されます。

――この仕事のやりがいは、どんなところにありますか？

自分が企画した展覧会の内容は、企画段階では自分にしかわかっていないので、それが実際に姿を現したときに、初めてみなさんに共有できるわけです。そこで、みなさんにいろいろなことを感じ取っていただけたり、学んでいただいたり、発見していただいたりして、いろいろなリアクションが返って来ますよね。その時が、一番やりがいがあると感じますね。「考え方が変わりました」「見方が変わりました」「そのアートについてより詳しく知りたくなりました」など、なんらかの形で観た人の好奇心や知の入り口を広げるという接点があったということですよね。そうしたナレッジプロダクション（知の創造）が、キュレーターの仕事の一番重要な目的だと思っています。

――観覧した方からはどのようにフィードバックを取っておられますか？

実際に感想をおっしゃってくださったり、レビューを書いてくださったり、美術展の入場者数からも把握できます。その方がどんなふうに観ていらっしゃるかとか、見ていただいたいわかりますね。

――著書を読んで長谷川さんは人間観察力に長けておられると感じますが、人に対する興味は昔からありましたか？

人間というか、都市や事物、人間を取り巻くものに対してとても関心があります。ただ、社交というのはあまり好きではないので、じっと観察するほうですね。パーティーなどに行くのは苦手ですし、面識のない方とお話しするのは苦手で、感性のやわらかそうな方たちを家に招待して少人数でお話しするのが好きです。

――大きなテーマになってしまいますが、長谷川さんが生きていくうえで、大切にしていらっしゃることはありますか？

あまりに大きなテーマなのでお答えするのは難しいですね。だれでもそうだと思うんですが、私は基本的には拘束されることや、だれかに押しつけられることに非常に抵抗がありますので、日々の暮らしにどれだけ心の自由があるのかということが大事です。その自由なものに対して、いろいろなものと交換していくじゃないですか。その交換によって自分がどれだけ相手に与えているのか、相手からどれだけ与えられて変わっていくのか。そういう更新、日々変わっていくメタモルフォーセス（変容）みたいなものが、絶えず自分の中に起こっている感覚で生きている時が一番大事ですね。ずっと変わらないというのは、私の場合はちょっと違うなと思います。

――著書の中でも「変容」という言葉がたくさん出てきますが、やはり、変容と生きることは繋がっ

『新しいエコロジーとアート――「まごつき期」としての人新世』
長谷川祐子 編
2022 年　以文社
3,200 円（税抜）

世界中の混沌から、時代を超え国を超え、なんらかのテーマを軸に、人とアートと空間、思考と感覚、有形と無形を繋げ、世界を覗くひとつの「窓」を出現させるキュレーターという仕事。彼らの視点を少し覗くことができます。アカデミックに芸術を捉えることに懐疑的な人、環境破壊を愚痴るだけであきらめている人に読んでもらいたい一冊。難解と決めつけず長谷川氏の第 1 章を読み始めると引き込まれるはず。

ているということですよね？

私たちは生き物ですからね。変わって当然ですよね。最後はみんな死ぬわけですから。変わらないというのは、ちょっとあり得ないと思っています。

――「お変わりありませんか？」という挨拶があるなど、日本人は変わるのが苦手だったり、どこか自由じゃなかったりするように感じます。それはなぜでしょうか。

やはり単一民族で島に閉じ込められているからです。沖縄や北海道などは、ちょっと異なった人たちだったと思いますし、韓国や大陸からもいろいろな人が移住し、実質は単一ではないんですけれども、基本的には、自分たちが単一民族だと思っているというイリュージョン（錯覚）がありますよね。多様性がないものは滅びます。滅ぶか、もしくは、だんだん弱体化していきます。一つのジャガイモしか作らなくなったとして、そのジャガイモにウィルスが植えつけられたとしたら全滅しますよね。それと一緒です。私はそういうふうに思っています。だから多様性というものが大事で、単一民族であっても、一人ひとりが多様な考えを持つことが許されることによって優れた民族は生き延びられると思います。日本にも優秀な方がいっぱいいらっしゃいますよね。そういう方々がいきいきと他者に対して影響を与えていくような環境を作ることが、非常に大切かと思います。

――そのことと芸術とはやっぱり関係がありますか？

そうですね。芸術というものは、やはり先の見えない予測できないものなので。だれも芸術のことをちゃんと語ることができません。しかも、多くの人の心を動かすことができる。なぜ感動するかなんて、だれも説明できない。そんな不可思議なものを、ずっと相手にして生きるわけです。こちらが柔らかくないと持ちません。

――著書の中に「国によって背景が違うので誤解も生じるけれどもある程度それを受け入れる」という意味のことが書かれていました。それは細部まで擦り合わせる必要はないという意味でしょうか。それともうまくいくと信じれば大丈夫という意味でしょうか？

なにか目的があって、一緒に仕事をしていくわけですよね。Aさんが目的を達成できたと感じていて、Bさんが目的を達成できなかったと感じている。それは完全にマッチしなくてもいいと私は思います。できごとは、そういうことは関係なく前に進んでいく。だから、私たちの意思などはちっぽけなものだと私は思っています。感じ方の違いなど、大したことじゃないんですよ。できごとがなるように導かれているのであって、そこが成るように「正」としてあるのなら、それは起こります。それは、AさんBさんではない、大きな力が誘導してくれると思っています。細かいことおっしゃる方もいらっしゃいますが、私はあんまり気にしません。

――きっとこうなるだろうと人間が結果を想定したところで知れていますし、結果を信じていろいろな方と関わると、逆に想像もしなかったようなところに物事が運ばれていったりしますよね。

はい。そういうことの連続だと思います。少なくとも自分はぶれないということだと思います。自分がこういう考えだと決めて接して事を起こし始めたわけですから、途中で態度がブレることは相手にも失礼だと思います。やり方は変わっていきますけれど、自分がこういうコアなことをやりたいがために、これをやっているという主軸はぶれてはいけません。

――ぶれずに、かつ、無理にこちらに引き寄せるのでもなく、相手に寄り添うためのポイントは？

「1メートル先ではなく、10km先を一緒に見ましょう」と言うと思います。10km先でも、1000km先でもいいんですが。

――一般的な日本人の仕事の仕方とはかなり違いそうですよね？

はい。私は中国に行った時も、ブラジルに行った時も、自分はここに生まれるべき人間だったんだなと思いました。

「世界と遊んでもらう。世界と遊んであげる。自分が一番喜びに思うことはなにかを考える」

――コロナ禍で楽しく生きる、自分を生かしていくにはどうしたらよいでしょうか。苦しむ人に言葉をかけてあげるとしたら？

自分が一番喜びに思うことはなにかを考える、ということだと思います。「喜び」という言葉が非常に大事で、よく「我慢」とみんな言いますよね。それを最初に言うのは私は卑怯だと思っていて、この状況下であっても「これが私の喜びです」と言えることはなにか。そのために、この美術館を作りました。みんないろいろ難しく考え過ぎだと思います。みんないつかは死にますから、なるべく喜びが多いほうがいいですよね。世界と遊んでもらう。世界と遊んであげる。机と遊んであげる。水と遊んであげる。すごく大事じゃないですか。それっていろいろな才がないとできませんよ。

――社会情勢が大きく変化しているのに、目標に向かって努力してという話が未だに多いなか、こういう話が聞けて嬉しいです。

その人のスタイルなので、その人にとって努力や我慢が喜びだという方は、そうされたらいいと思うんです。でも、我慢でやっているというのなら違うのかなと思います。喜びは、個々に違います。違う時間に、違う人から生まれてきていますので。

――喜びと向き合ったことがない人が多いと思うので、自分がなにが楽しいか、なににワクワクするかわからないのかもしれません。

それって生きていて辛くないですか？　どうすればいいでしょうね。でも、自分の趣味とかありますよね？　食べる時が幸せとか、寝てる時が幸せとか。

自分のことは、自分では見えないものです。わかりにくい方は、自分の友人や、距離を置いて見てくださるセラピストさんなど、いろいろな方とたくさん話すことによって、自分自身のミラーになって見せていただくことです。そうするといろいろなことがわかってくる。一つのミラーだけでは足りないので、複数の方にミラーになっていただけば、いろいろなことがわかってくるんじゃないでしょうか。近所のお寺のお坊さん

レアンドロ・エルリッヒ《スイミング・プール》2004　金沢 21 世紀美術館蔵　撮影：渡邉修　提供：金沢 21 世紀美術館

撮影：石川幸史　提供：金沢 21 世紀美術館

撮影：渡邉修　提供：金沢 21 世紀美術館

とか、昔はそういう人たちがいましたよね。自分の家族や兄弟は、よく知っていてよく見ているわけですから、そういう人と話をする。それが大事だと思います。

――柔軟性がおありですが、いつから身についたと思われますか？

仕事の経験によると思います。経験が広がってくると予測可能性の範囲が広がっていきますよね。意外なことが起こっても、こういうふうに対応したらいいんじゃないかと。例えば、Aという記憶をAダッシュのケースに適応すればいいとわかる。その積み重ねが柔軟性につながっていくと思います。若い時は自分を確立しなきゃいけないので、どうしたって私が私がと意地になってしまう。でも、年を重ねてくると、それはどうでもよくなってきて、私を豊かにしてくれるのは周りなんだということがわかってくるので、そうするとベクトルが変わりますよね。この人を幸せにできるならいいか、ということが出てきたりする。そういうことではないでしょうか。

NHKの『プロフェッショナル仕事の流儀』に出演した時にも話しましたが、「自分がいるところをユートピアにする」ということ。ここが嫌だと文句を言う方が多いですが、それだったらそこにいるべきではない。いろいろな必然があって、本人の決断があって、そこにいらっしゃるわけなので。それなら、自分がそこにいることで周りをユートピアにする。そういうふうに思ったらいいんじゃないかと私は思うんです。自分の居場所をユートピアに変えていく。自分のいる場所の文句を言うのは、生産的ではないと思います。時間の無駄です。人生は短いので。

――左京区の魅力はどんなところにあると思いますか？

左京区の魅力は、やっぱり東山沿いに、銀閣寺、南禅寺、霊鑑寺など、お寺がたくさんある並び、そして、東山から水が出るので、その水でお茶を点てたという流れがあって落ち着いた雰囲気ですよね。それと、やはり京都大学が醸し出す雰囲気がいいですよね。また、琵琶湖のほうから水が流れてくる南禅寺の水路閣など、水の入り口といった感じが風水的な感覚で好きなんです。今住んでいるところも、琵琶湖疎水があって後ろが山がなので、ちょうど水と山の間にあり風水的にも良い場所なので、そういう感じが好きです。スーパーマーケットやレストランなどいくつかお気に入りの店もあります。京都芸術大学などの美大があったり、平安神宮や府立図書館、岡崎公園があったりしますよね、そのあたりもいいなと思います。いわゆる文教地区ですよね。

――左京区は絵画や音楽などをしているアーティストが多いとも言われていますが……。

それはあまり知りませんでした。私が知っている現代アートのアーティストは中京区や上京区にも住んでいたりしますので。

――最後に左京区の方へのメッセージをお願いします。

ナレッジプロダクションや感性のプロダクションをするのに、左京区はいい場所だと思います。いろいろな意味でのプライドや好奇心を持ちつつ、自分らしく、それこそユニークな日々の喜びを持って、いろいろな形で交流したり、ご覧になったり、地域を活用されるといいのではないでしょうか。もう少し、夜まで空いている食べ物屋さんがあるといいですよね。

長谷川祐子氏が企画した展覧会のお知らせ

イヴ・クライン
《人体測定（ANT66）》
1960 年
水性メディウム、紙、カンヴァス
157 × 311 cm
いわき市立美術館蔵

『時を超えるイヴ・クラインの想像力―不確かさと非物質的なるもの』

2022 年 10 月 1 日（土）～ 2023 年 3 月 5 日（日）
10:00 ～ 18:00（金・土曜日は 20:00 まで）
会場：金沢 21 世紀美術館 展示室 5 ～ 12、14、光庭 2

展覧会の詳細はこちら▶

そのほかの展覧会情報はこちら
金沢 21 世紀美術館 web サイト
https://www.kanazawa21.jp

「左京区の生き様アート」

一流の芸術家の作品を美術館で鑑賞するのもいいけれど、歩いていてふとした瞬間に出合うアートに心を動かされるような街にしたい。アートには創る人の生き様が表れる。生き様に一流も二流もないはずだ。人がいて街ができる。アートを通して誰かの生き様を感じる街って面白いと思うのだが、どうだろうか。

バンスリー奏者　tomomi* *

バンスリーという横笛を吹いている tomomi* * さん。ヨガをしていた流れでキールタンに参加するようになり、さまざまな楽器に触れてきた。「前に立つというよりも、後ろで目立つほうが好き」という tomomi* * さんが 4 年前から始めたバンスリー。竹製で日本の篠笛にも似た、とっても優しい音。指が届くのだろうかと思うようなサイズのバンスリーを身体全体で奏でる tomomi* * さんは、まるで笛で歌っているよう。八瀬の猫猫寺開運ミュージアムに行けば会えるかも。

[instagram]
https://www.instagram.com/tomomi_bs/

「こっそり教えたい左京自然スポット」

針畑川@久多

南北に伸びる左京区は 8 割が山。北は中山間地域と呼ばれており、その最北端にあるのが久多である。ここは「久多の里オートキャンプ場」のサイトから降りたところにある針畑川。キャンプ場の川沿いのサイトから下に降りると川で遊ぶことができる。小浜方面に向かって 367 号線を走ると、大原の先で一旦、滋賀県に入る。その先を走ること 40 分ほどで橋を渡って安曇川の西側へ向かうと、再び、京都市左京区に入る。細く曲がりくねった山道を行った先にこのキャンプ場がある。宿泊でも日帰りでも OK で、空いていれば当日でも利用可能（電話予約がお勧め）。ネット環境がなくても良い PC 作業なら、ここでリモートワークするのも楽しい。川に足をつけてはキャンプサイトに戻って木漏れ日の下で仕事すると、自然のパワーのおかげでアート思考が冴えるかも。

「左京変人図鑑編集部コラム」

「変わってる」を尊重し合う

左京変人図鑑　副編集長　藤嶋 ひじり

編集ライターという仕事をしてきて感じるのは「言葉」の扱いの難しさ。私たちはそれぞれ異なる環境で、長い時間をかけて、暮らしのなかで日本語をインプットしていく。同じ日本人であっても、その言葉の定義の認識が一致しているとは限らない。仮に定義の認識は似ていたとしても、その言葉の持つイメージは多様なはずだ。それにも関わらず、私たちは相手も自分と同じように、その言葉を解釈しているであろうとの予測の元に会話している。日本人同士だから、わかりあえるはずだという前提で、話をする。わかり合うべきだ、わかり合うことが重要だ、わかり合うことが愛情だと考えている。だから、トラブルが起こる。たとえば、「家庭」という言葉を聞いたとき、温かいものだとイメージする人もいれば、閉塞感、冷たさ、不快感をイメージする人もいる。そういった一つひとつの言葉の持つイメージに配慮して、なるべく平坦に、広く伝わるように心がけて文章を書くのが、編集ライターという仕事である。

この『左京変人図鑑』についても、創刊したことを人に伝えると「お、いいやん！　変人図鑑って名前がいいね」と言う人と、「面白そう！　でも、変人って！」と反応する人がいる。突っ込みたくなるのは当然だと思う。実は、私も初めて聞いたとき、発案者の寺嶋に突っ込んだ（笑）。そんな冊子名でもインタビューを受けてくださるのは、「人はみんなそれぞれ違う」ということを受け入れ、自分の生を楽しんでおられる方たちばかり。他人が自分をどう思うのか、そんな次元を超越して、人生を楽しんでおられる方だからこそ、この冊子の企画意図が伝わるのだろうと思う。人が自分のことをどう思うか。そんな問答に、大切な自分の人生の時間を費やすなんてもったいない！と知っておられるのだ。

変人とは、自分の「命」を、そして「人生」を、とても大切にしている人のことではないだろうか。そう思うようになってきた。

では、人と違うことをしようとするとき躊躇する人は、自分よりも人の命や人生を優先しているのだろうか。「利他の精神で生きましょう」という人は一定数存在する。しかし、俯瞰すると、「利他の精神を持つ自分」が大切なのであり、結局のところ、その方も「自分」を大切にしている、とも考えられるのではないだろうか。

変人を批判的に捉える人は、「協調性がない」「自己中心的」「利己的」と捉えている傾向があるように思う。でも、視座の違いがあるだけで、どちらも「自分」を中心にしているのではないか。「自己中心的」という言葉は多くの場合、否定的、批判的に使われるけれど、実際は、だれもが自己中心的。そもそも、私たちは、どこまでも自分を中心にしか生きられないものではないかと思う。

幼いころは利己的だが、大人になるに連れて利他的になるものだと、利他を美学とする人は言う。それは一理あるけれど、「鶏が先か、卵が先か」の論争に似ている。利他と利己。どちらの視点も必要だ。光と陰、どちらも必要。水と火、どちらも大切。というのと同じではないだろうか。

私たちはみんな生きるために存在している。必要があって生を受けている。そう仮定すると、だれもがそれぞれの命を大切にして、だれもが自分のため、かつ、みんなのために生きればいい。

利他と利己は、ひとりの人間のなかで共存できる。そこにタイムラグはある。リアルタイムに全員が利己状態になることは不可能だろう。でも、例えば、正面から歩いてきた人とお互いに「どうぞ」と道を譲り合うように、少しずつ時間や空間を譲り合いながら生きる。だれかの利己のために、別の誰かが利他になる。そんな風に譲り合えたらいいのではないか。

宇宙という「全体」と、自分という「個」。どちらかだけじゃなくて、どちらも大切にする。それが生きるうえで大切なことである。変人と呼ばれる人は、きっとそれを教えてくれている。

「わかるはずだ」に話を戻す。「この人、どこか変わっている」。違いを見つけると、人は、避けようとしたり排除しようとしたりする。でも、私たちは「人」のことをわかる必要はそもそもないのではないか。心理学でいう「共感」は、同じ気持ちになる（同感）ことではなく、立場を置き換えて考えてみるということ。それぞれ異なる肉体で、異なる視点で環境で生きてきた他者のことを想像でわかろうなんて無理がある。ある意味、傲慢だ。わからないことは罪ではないし、わかってもらえないことは寂しいことではない。ただ、わかろうとする。歩み寄る。想像する。相手を自分寄りに変えようとする必要もなければ、同じになる必要もない。考えや性格が自分と完全一致する人を探すのは無意味だ。なぜなら自分と一致するのは自分だけだから。違いこそ、唯一無二の証明。存在意義だ。それぞれの「変わってる」を、ただお互いに尊重できれば、この世はもっと生きやすくなる。私はそう思うのだ。

人、自然、アートと街をつなぐ 左京変人図鑑　2022年10月1日発行　第2号　取材・編集　北風と太陽　発行責任者　寺嶋 康浩・藤嶋 ひじり

左京変人図鑑編集部からのお知らせ

アトリエを探しています！

２年前から絵を描き始めた。最初は上手に描こうとしていたのだが、それがとても苦しくて詰まらない。そこで上手下手を気にするのをやめて、考えて絵を描くこともやめてみようと思った。しかし、考えるのをやめるのはとても難しい。思いつきで音楽をかけて踊りながら絵を描いてみた。手に絵の具をつけて身体が動くまま感覚的に描いていく。描くというよりキャンバスを絵の具で汚す感覚だ。すると、私はこんなに楽しく絵を描けるのか、と驚きを感じた。それを多くの人に体験してほしい。大人も子どもも上手下手を気にすることなく、思うままに感性を発揮できる安心できる場を作りたいと考えている。左京区近辺で天井が高くて広いアトリエスペースをお持ちの方はご連絡いただけると嬉しい。

左京変人図鑑編集長　寺嶋 康浩
contact@henjin-zukan.net

TERACY0301

かもがわデルタフェスティバル

地域在住の大学生、留学生、外国籍の親子を交えた多国籍なお祭り。13 時から歌やダンスなどのステージ、19 時から盆踊り大会。盆踊り練習会は 10 月 8 日（土）にあり。詳細は公式サイトでご確認ください。

日時：10 月 15 日（土）13：00 ～ 20：30　※雨天の場合 16 日（日）に延期
会場：希望の広場（養正児童公園）https://deltafes.com/

『左京変人図鑑』は広告ページのない冊子です

私たちは「広告のないフリーペーパー」を作るという試みに挑戦しています。できうる限り中立でフラットな状態で情報発信していきたいのです。そして、この考えに賛同してくださる方からの、制作費用への協賛については大歓迎いたします。ご希望の場合、誌面にお名前を掲載いたします。

『左京変人図鑑』の設置場所を募集中です

『左京変人図鑑』を読んで「うちに置きたい」と思っていただけた方は、ぜひ、ご連絡ください。左京区外でも構いません。「なんだかおもしろそう！」「変人さん大好き！」という方がいらっしゃいそうな場所に、ぜひとも置いていただければ幸いです。

編集長：寺嶋康浩

左京区在住。デザイナー、コピーライター、ボディワーカー、ダンサー、画家、電磁波環境測定対策士、第二種電気工事士。市民団体「みんなでつくる 左京朝カフェ」のスタッフ。鞍馬川のゴミ拾い活動や目的なくゆるりと人と繋がる場づくり「ゆるりつながるカフェ」を月一開催中。

副編集長：藤嶋ひじり

左京区在住。編集者、シンガーソングライター、FM87.0 RADIO MIX KYOTO 旅リポーター、All About コラムニスト、認定心理士、保育士。（株）リクルート『とらばーゆ』編集者を経て、日経 BP 社、小学館、NHK 出版などで取材・執筆。インタビュー実績 1,900 人。3 姉妹の母。

後援：みんなでつくる左京朝カフェ　協賛：猫猫寺開運ミュージアム、北風と太陽
取材協力：金沢 21 世紀美術館、金沢 21 世紀美術館 館長 長谷川祐子氏

左京変人図鑑の協賛や配布してくださる企業、団体、個人を募集しています。詳しくは以下の web サイトからご連絡ください。

https://henjin-zukan.net